NPO法人 自然と緑

NPO 法人自然と緑会報 2026 年 11 月 1 日発行第 151 号

特定非営利活動法人 自然と緑
代表者 伊藤 孝美
〒540-0006 大阪市中央区法円坂 1-1-18
大阪市教育会館 5 階
TEL : :06-6809-1700 FAX : :06-6809-2702
E-mail : info-sm@shizen-midori.org
URL : https://shizen-midori.org

第 32 期自然大学の募集が始まりました

自然と緑担当理事 牧野 道夫

今年は 7 月の自然大学 30 周年記念シンポジウム、記念誌の発行と忙しい年となりました。今期 31 期生 40 名の皆さんも大半の講義を終えて、終盤に向け打ち解けたいい感じになってまいりました。

さて、来期の第 32 期自然大学につきましては募集チラシも出来上がり、只今各方面への配布にかかっている最中です。来期大きく変わる点は渡辺弘之学長が本年度をもちまして学長を勇退され、春日山実習でお馴染みの前迫ゆり先生が新たに学長に就任されます。

来期の受講料は 40,000 円。募集人員は 30 名程。カリキュラムにつきましても従来通り座学講座 7 回、野外実習 7 回、計 14 回の講義を予定しております（下記予定表をご覧ください）。会員の皆様方には毎年お願いをしておりますが、昨今受講生の確保が難しく大変苦労をしております。自然と緑ホームページからの呼びかけ、公共施設などへのチラシの配架、新聞記事記載などを行っておりますが、例年一番有効なのが会員の皆様からのご紹介です。今回も皆様のお手元に募集チラシを送付致しますので、新入生募集のご協力をよろしくお願いしたいと思っております。

また、自然大学のリーダーさんについても毎年受講生の人数に対し足りてないのが現状です。新旧問わずステップアップの修了生であれば資格がありますので、皆様の積極的なご参加をお待ちしております。新しい人との出会いに毎年ワクワクする楽しみがあります。意欲をお持ちの方、事務局にご連絡下さい。

第32期 自然大学カリキュラム

室内講座（7回） 野外実習（7回）

（日程や会場、内容等は諸事情により変更になる場合があります。）

1 2027年4月4日(日) 開講式、開講講座 室内講義
「開講式」学長挨拶
地球環境と人間 ―人類は生き残れるか？―
伊東 明 教授(大阪公立大学大学院教授)
人類の誕生と文明の発展、これを可能にした気候環境。生き延びた文明と滅んだ文明、他 大阪市教育会館東館

2 2027年4月10日(土) 野外実習
岬町長崎海岸実習－海の生態と環境
鍋島靖信 教授(前大阪府環境農林水産研究所主任研究員)
太古生命は海から。大阪湾に僅かに残された自然海岸観察、環境の変化が海の生物に与える影響、他 大阪府泉南郡岬町・長崎海岸

3 2027年4月18日(日) 室内講義
森林の生態 ― その仕組みと利用 ―
伊東 明 教授(大阪公立大学大学院教授)
森林ができるまで、世界のさまざまな森林、森林生態系の機能と地球環境の中での役割、他 大阪市教育会館東館

4 2027年5月9日(日) 野外実習
春日山照葉樹林生態実習－世界遺産の照葉樹林とシカの相互作用
前迫ゆり 学長(公益財団法人大阪みどりのトラスト協会会長)
奈良のシカとナギ林の生態系について、暖温帯地域に成立する春日山照葉樹林の生態系の観察、他 奈良市・春日山一帯

5 2027年5月23日(日) 野外実習
金剛山実習－夏緑林の生態系
伊藤孝美 講師(NPO法人「自然と緑」理事長)
金剛山のブナ林の成り立ちとその構造、植物と光との関係、森林土壌の観察、他（登り、下りとも歩きます） 大阪・奈良県境金剛山

6 2027年6月20日(日) 室内講義
水域生態系－水と生物と環境
遊磨正秀 教授(龍谷大学名誉教授)
熱帯(タンガニイカ湖、マラウイ湖)、温帯(琵琶湖)、寒帯(バイカル湖)の比較、琵琶湖流入河川について、他 大阪市教育会館東館

7 2027年7月18日(日) 室内講義
大気と気候－気候と人間環境 大藤明克 教授(工学博士)
気候とは？ 地球温暖化に伴う気候変動と異常気象、大気汚染等の環境問題について、他 大阪市教育会館東館

8 2027年8月1日(日) 室内講義
土の生態学－土壌生成因子と森林土壌
鳥居厚志 教授(森林総合研究所関西支所 地域研究監)
地形と地質、土壌母材と土壌の生成、土壌の構造と理化学性、森林土壌の実際、他 大阪市教育会館東館

9 2027年9月19日(日) 野外実習
琵琶湖実習－琵琶湖(淡水湖)の生態
滋賀県職員、琵琶湖博物館の職員
琵琶湖周辺の生態系観察、淡水プランクトンの検鏡実習、博物館で歴史と文化に触れる、他 滋賀県草津市・琵琶湖博物館

10 2027年10月21日(木) 野外実習
京都大学上賀茂試験地 実習
伊藤孝美 講師(NPO法人「自然と緑」理事長)他
マツ類とタケ類のコレクションを誇る林には各種のマツ類が植栽。その葉・球果のちがいや、マツの材線虫病に強い品種の観察。タケ類では開花後発芽更新したモウソウチク林の観察等 京都市北区上賀茂本山

11 2027年11月7日(日) 野外実習
馬ヶ瀬山自然大学演習林実習－森林作業で汗を流す
伊藤孝美 講師(NPO法人「自然と緑」理事長)
琵琶湖西の馬ヶ瀬山国有林で琵琶湖の水源を守るため森林管理の実習を行う。周辺の自然観察、他 滋賀県・馬ヶ瀬山国有林(湖西線北小松)

12 2027年12月5日(日) 室内講義
「森林動物(ミミズ)」「熱帯非木材林産物」
渡辺弘之 教授(京都大学名誉教授)
森林生態系の中での動物の役割、ミミズってすごい、熱帯林の産物と人々の生活、カイガラムシが熱帯林を救う、他 大阪市教育会館東館

13 2028年1月16日(日) 野外実習
山田池公園実習 佐々木泰彦 講師(NPO法人「自然と緑」前監事)
遠い国から旅してきた渡鳥の観察、野鳥の生態と飛ぶための身体の構造について、他 大阪府枚方市山田池公園

14 2028年3月5日(日) 室内講義、修了式
「森林と林業」松下幸司 教授(元京都大学教授)
戦後の造林政策の展開過程と近年の造林政策と課題を学ぶ
「32期まとめ」「修了式」学長挨拶 大阪市教育会館東館

―151 号目次―

p 1	第 32 期自然大学の募集が始まりました	自然と緑担当理事　牧野道夫
p 2～p 3	渡辺弘之の未解決事件簿（33）繋がるケムシ（行列毛虫）	自然大学学長　渡辺弘之
p 4	さいとうさんの“話のタネ”（78）石垣のサツキ	前自然と緑理事長　齊藤佻三
p 5～p 6	第 30 期自然大学実習感想文「馬ヶ瀬山演習林」（抜粋）	第 30 期自然大学受講生
p 7	私が見た植物の不思議　（6）ヌルデ編	自然と緑理事　関澤友規子
p 8	寄付等の御礼/活動報告／編集雑記	自然と緑会報編集部

渡辺弘之の未解決事件簿 （33） 繋がるケムシ(行列毛虫)

自然大学学長 渡辺 弘之

ケムシやジネズミの一列縦隊の移動

ツバキの葉の上のチャドクガの集団

ツバキやチャの葉を食べるチャドクガの幼虫は集団でいて、葉を食べ尽くして次の葉に移動するとき、３～４匹が横に並んだ縦隊で動く映像が撮られている。時に、一列縦隊のこともあるようで、動きながら頭を左右に振るなど、面白い行動をするようだ。サクラの葉を食べ、サクラを丸裸にするモンクロシャチホコ（テンマクケムシ）も幼虫は集団でいるが、これも移動するときは一列になるという。

ジネズミはネズミと名がついているが、モグラの仲間で、このジネズミの数頭の群れが一列になって左右に振れながら走る姿はほほえましい。この光景は「ダーウィンが来た」で放映され、チューチュートレインと呼ばれ一躍有名になった。これをキャラバンと呼んでいるが、母親の尻尾を咥え、その後の子供たちはどれも前のジネズミの短い尻尾を咥えている。ネットでちょっと検索されてみるといい、楽しくなる光景だろう。

日本にもトガリネズミ科のジネズミ亜科にジャコウネズミ、ニホンジネズミの他、奄美・沖縄にワタセジネズミ、奄美大島にオリイジネズミ、トガリネズミ亜科にカワネズの他、アズミトガリネズミ、オオアシトガリネズミなど５種がいるようだ。トガリネズミの仲間はどれもキャラバンするといわれるが、残念ながらどれも数が少ないし、多くは夜行性だ。私自身もモグラの仲間ヒミズの死体は拾ったことはあるが、トガリネズミの実物、チューチュートレインの実際はまだ見たことがない。

インド北部山岳地のケムシの行列

行列ケムシ（インド北部）

旧友、京大・山岳部出身の谷口朗さんが、インド北部の山へトレッキングに行かれた時、岩の上を 1 列になって 1 本の細い鎖か紐のように伸びるケムシの写真を撮って送ってくれた。蛾の幼虫がこのような行動をすることはヨーロッパでは古くから知られていたようで、動物学雑誌 46（551）（1934）に谷津直秀により「行列毛虫」として紹介されている。

調べて見ると、これはマツノギョウレツケムシ（マツノギョウレツケムシガ）（*Taumatopoea pityocampa*）というやや大型の蛾の幼虫で、行列の時、先のケムシのお尻にはくっついてなく、わずかに隙間があるようだ。この蛾は南ヨーロッパだけでなく、北アフリカから中央アジアまで分布し、マツの針葉を摂食し、テントと呼ばれる大きな巣を集団で作るらしい。毒毛を持つので触ってはいけないとされる。

フランスではこの行列は有名なものらしく、ネットで検索してもたくさんの映像が出てくるし、本種によるマツ類への食害とフランス北部への侵入が問題になっているらしい。インド北部で撮られたこの写真も本種かも知れないし、あるいは近縁の別種かも知れない。

それにしてもこのケムシの移動、びっくりする光景だったろう。虫嫌いの人ではギャッといって逃げただろう。よく撮ってくれた写真だ。

タイ東北部の蛾の行列

1979 年から 1981 年まで、タイの東北部コンケンにあるコンケン大学農学部と共同で焼き畑の研究をした。私の担当は土壌動物への影響であった。明瞭な乾季のあるこの地方の森林はいわゆる雨緑林、すなわち雨季になると新緑になる。上木はほとんどフタバガキ科の落葉樹であるが、地表近く、低木には常緑樹がある。実際に、この森林の樹木を伐採・火入れし、火入れ前と火入れ後の土壌動物の変化、農地への変換後の土壌の物理性・化学性の変化とともに、土壌動物の生物性の変化を 3 年間にわたって調べた。

コンケンの街に長く滞在したということだが、年降水量は800 ㎜程度、11 月から 4 月まで雨は降らない。あちこちで山火事・野火が発生する。空中に細かいダストが漂い、夕日が真っ赤でまぶしくなくなる。田んぼは干上がり、その隅に掘られた深みに集まった魚もカエルも水生昆虫も、みんな食用に捕獲されてしまう。

畑地に転換後、裸地に冠毛で飛んでくるパイオニア植物のキク科のヒマワリヒヨドリ（*Chromlaena odorata* = *Eupatorium odoratum*）とベニバナボロギク（*Crassocephalum crepidioides*)が突然、繁茂した。ある日のこと、このヒマワリヒヨドリの葉の上に何か動くものがいる。近寄ってみると、ケムシが茎や葉の上を長く一列になって移動していた。その長さは1mを越えた。緑色のからだに黄色い縞筋の入ったきれいなケムシであった。行列する習性をもったケムシがこんなところにいるのに驚いた。

ヒマワリヒヨドリの葉の上を移動する蛾の幼虫（タイ、コンケン）

ヒマワリヒヨドリは熱帯アメリカ原産、ベニバナボロギクはアフリカ原産だが、現在は全世界の熱帯・亜熱帯域に広がり、焼畑放棄地などでは、これがしばしば優占する。とくに、ヒマワリヒヨドリの方は高さ 3m以上にもなる低木状草本なので、侵入されたら駆除は難しいというやっかいな外来種だ。この上を繋がって動いていたのだから、あるいはこれが食草だったのかも知れない。どんな成虫になるのか、学名は何か調べてみたいと思ったが、見たのはこの１回だけだった。

台湾の毛虫の大集団

2014 年 7 月、台湾北部の宣蘭市棲蘭山荘に泊って、馬告生態公園神木園のタイワンヒノキ（ベニヒ・紅檜）の巨木林を見学に行った。日本には日光杉並木、信州戸隠神社、高野山奥の院、高知魚梁瀬千本山スギ林、さらには各神社で注連縄を張られたご神木のスギなど、スギの巨木は各地にあるが、ヒノキの巨樹・巨木は少ない。ヒノキはスギにくらべ生長が遅く、また大木にはならない。これだけに耐久性がある。明治神宮や橿原神宮の鳥居は大きなヒノキであるが、こんな大きなものは日本にはなく、いずれも台湾から輸入のタイワンヒノキかベニヒである。これらは現在は台湾でも輸出禁止になっている。

馬告生態公園神木園のタイワンヒノキはさすがにすばらしかった、どれも巨木だったのである。予定は台湾中部山岳の阿里山のタイワンヒノキ林であったが、嘉義・阿里山登山口で台風接近のため登山道が閉鎖になり、よく調べていなかった馬告生態公園へ行き先を変更したのだが、ここでもタイワンヒノキ・ベニヒの大きさは十分に理解できた。

樹幹を覆う蛾の幼虫の塊（台湾、宣蘭）

前泊した宣蘭山荘周辺を散策しているとき、１本の樹皮の白い大きな木の地表近くが、ペンキを塗ったように異様に黒く見えた。気になって、近寄ってみると、突然、大きな黒い塊全体ザザーと動いた。黒っぽい、蛾の幼虫の大集団であった。私が近づいたので、威嚇したということであろう。大きな鳥が近づいても、これにはびっくりするだろう。これも一度見ただけだが、どんな蛾になるのか見てみたいと思った。

台湾へもこれまで 3 回行ったことがあるが、自然観察旅行・観光であった。もちろん、自然観察旅行・観光であっても、他の国とちがうものがあり、興味は尽きない。行ってみたいところもまだたくさんある。台北から、中部の嘉義、甫里や南部の台南・高雄など西海岸は行ったが、東海岸は通過していない。行きたいところは、台湾各地の夜市だ。東南アジアの街にもナイトバザールなどあるが、お土産などが多い。ところが、台湾の夜市はオール・食べ物だ。すきっ腹で行って、満腹になる。

さいとうさんの“話のタネ”(78) 石 垣 の サ ツ キ

前自然と緑理事長　齊 藤 佻 三

2025年9月30日東京で高さ4～5mのコンクリートの擁壁が崩れ、上に立っていた木造の戸建て住宅が崩落した。（写真は日経XTECHより）瓦礫は下の通路を塞ぎ、一部は隣接するマンションのベランダまで達した。擁壁に水抜き穴がなかった。もう1例は2021年6月25日大阪市西成区の空石積みの擁壁が崩壊し2棟(4戸)の住宅が崩落する事故があった(写真は日経XTECH)。ここは空石積み擁壁で排水不良など複数要因が重なったと考えられている。

杉並区の事故現場(日経 XTECH)

西成の崩壊(日経 XTECH)

崩壊は主に雨水の浸透や土圧の増加、内部空洞化、地盤変化などが原因で起こる。農地の例もある。石垣が崩れた原因を聞くと、大雨が降った後に崩れたという人がほとんどだが、地震で崩れたという話は聞いたことがない。

姫路城の石垣補強

1585年木下家定が姫路城主になった。この頃は石垣を真っ直ぐに作ったので長年経過すると石垣の内に水が溜まって中ほどが大きく膨らみ俗にいう「石垣の腹ぼて」になって崩れそうになった。石垣追加補強した石垣が現在でも残っている。昔の人は石垣最大の敵は「水」ということを経験上知った。

知恩院の崖のサツキ

1620年（元和6年）から1629年（寛永6年）にかけて徳川秀忠が大規模な修築を施した大坂城の石垣は中ほどを凹ませて「石垣の腹ぼて」を防ぐように工夫をしてある。

大阪城の石垣

そこでサツキだが、知恩院では崖にサツキが生えていた、他の植物はほとんど生えていない。岩出市根来で石垣上に植えたサツキがあったが、石垣は腹ぼてになっていた。右の写真のように上のサツキが石垣の間に下がって芽を出し、石垣が崩れないのを見た人がいたのだと思う。そして石垣の間にサツキを植えると石垣は崩れなかった。

庭に植えたサツキが石垣に

岩出市根来の腹ぼて石垣

昭和時代の1戸建ての石垣にサツキを植えた住宅がたくさん出来た。低い石垣の隙間にサツキが植えてある。

石垣の間にサツキ

私は30代のころ庭にサツキを育てていた。2mの高さのブロック塀と軒下に針金を渡し、サツキ棚の上に波板で日陰を作った。雨の日は家の方に波板を引き寄せ洗濯物が濡れないようにしてサツキの雨水を与えた。夏は今ほど暑くは無かったが、植木鉢の水分では朝、夕に撒水しないとしおれてしまう。サツキは水を好むことを知った経験から石垣のサツキは雨水を吸ってくれる排水パイプ代わりに植えたのだと思った。サツキの横にパイプを入れた家もできた。

サツキの横にパイプも

石垣の間にサツキ

現在は「水抜き穴」の設置が義務付けられ、地中の水を出し、サツキは植えていない家が増えている。

自然観察をしていると石垣で時の流れが見える事もある。

第 30 期自然大学　馬ヶ瀬山演習林実習感想文（抜粋）
－森林作業で汗を流す－

2025. 11. 9

伊藤 孝美講師（自然と緑理事長）

≪１班≫

玉伐るぞ

ロープをかけて、倒す方向に入るな！！

上手いこと倒れたなー

〇当日は 1 日中雨が降り続きました。私たちが小屋に到着した時には、既にブルーシートで雨除けのタープを張ってくださっていて、とてもありがたく思いました。その中に荷物を置いて、29 期生の方の感想文にあった教え通り、ヘルメットは顎紐の長さを何度も調節してきちんとかぶりました。伊藤先生の講義を拝聴している間にもタープのたるみに雨が溜まり、どなたかがはけてくださっていました。やはり、この雨では伐採の実習は無理だと言うことで、スタッフの方々によるデモンストレーションのみになりました。資料の樹の伐り方で、受口・追口・つる等のことを予習して、その理にかなった方法に感心していたのですが、実際に見せて頂いて、より感心したのは、倒したい場所の見当をつけるために地面に丸太を置いて、次に、鋸を引く方向と平行になるようにもう 1 本丸太を置いて鋸をどう引くかを決めていったことです。どの樹を伐採するのか、その樹の枝ぶりは、歪みは、そして、ロープはどの木にかけるか、その角度はどうか、高さはどうか等々熟練の技能が必要であると思いました。玉伐りの体験をさせて頂きました。アスリートの方が「力み過ぎて～……」とインタビューで言っているのをよく聞きますが、本当にその通りでした。私は地元で玉伐りや枝払いのお手伝いを何度かしたことがあったので、ちょっとええとこ見せようとしたのが失敗のもとでした。鋸が引っかかって伐れません。力を抜いた途端にサクサク気持ちよくできました。楽しかったです。伐採したところを見上げると小さなギャップができていました。デモンストレーション終了後受講生は一足先に失礼しましたが、雨に濡れた道具のメンテナンスと片付けをして下さったスタッフの皆様に感謝申し上げます。

〇当日は雨天での間伐演習という事で、ヘルメットを受け取ると更に緊張感も増してきました。伐採の注意点や間伐の仕方の説明を受け、実際に何人かのメンバーの方が玉採りに挑戦されました。皆さん、初めてとは思えないほど、良い音を立てて鋸を引かれていて見ているだけでも気持ち良かったです。玉採りされた樹を手に取ってみるとヒノキのよい香りがしました。間伐された樹は細く見えましたが、断面の年輪は細かくギュッと詰まって整っていて、樹齢 30 年ほどとの事で、ゆっくりじっくり成長したのだなぁと感心しました。駅に向かう帰路途中で、渡辺先生が"樹幹流の泡立ち"を見つけられ、その場にいた人達に教えて下さいました。ネットで調べてみると"泡立ち"は雨の日の条件が揃った時に見られる現象だそうで、幸運でした。昼食は駅のホームでしたが、実習を無事終えた安堵感もあり、和気あいあいと子供の頃の遠足の様な雰囲気で、楽しい思い出となりました。雨天の中での準備や後片付けなど運営スタッフの皆さまのご苦労に改めて感謝申し上げます。ありがとうございました。

〇伊藤孝美先生の「演習林実習」の授業を受けて、杉や桧を育て利用する事により地球温暖化現象を緩めることが出来るが外材を使うと環境を守れないとの先生の講義が胸に沁みました。実習当日は雨で足元が緩み不安がありましたがスタッフによる見本の間伐がありました。（À）指定された木を倒す方向をきめる。ロープを掛ける。（B）À の方向に幹の 4/1 の深さにＬ字形に切り込みを入れる。反対の方向からノコギリを入れる。（C）（B）の切り込みまで 1 ㎝残して止める。綱を引き、木を倒す。（D）倒した木の枝を切り落とす。木を 2m位に切り分ける。間伐した木は腐って地に返り土地を肥やす。ロープの掛け方や切り倒し方が力学にかなっていて事故が起きにくく安全な方法と感じました。あいにくの雨で実習はここで終わりました。私たち受講生の体験は無く残念でした。尾根まで登り琵琶湖の水源や植物観察を行うことはできませんでした。いつか体験させて頂きたいと思います。今日も一日楽しい授業をありがとうございました。　　―山路来て足元弛む露しぐれ―　智子

≪２班≫

〇感想文、あまり書くことが思いつかないのですが……。楽しみにしていた森林実習があいにくの雨で、内容を縮小せざるを得ず残念でした。それでもスタッフの方のデモンストレーションを見られたので、プリントの資料だけではピンと来なかった作業も実際に見て理解出来て良かったです。自分でもやってみたいとは思いますが、遠いのでハードルが高いです。手入れされない山が多くなっている今、間伐の重要性が益々高まっているのに、担い手不足は深刻ですね。北小松駅付近、湖と山がとても近くて驚きました。駅からの道の多量のドングリ、東北の熊にプレゼントしたいくらいでした。普通の行事は雨天中止が多い中、雨天決行の実習は良い経験でした。

〇雨脚が強く、今日はのこぎり木を切ったり、引っ張って倒したりと危険な作業を伴うのに厄介だなと思っていたら、作業はほとんどなく、講師によるデモンストレーションで終わりました。チェンソーを使わないのは急速に木が倒れず、倒れ方を調整できると説明がありましたが、実用ではなく、学習のためであれば、大がかりな電動ノコより、手で引くノコギリの方がずっと使いやすいです。ただ、間伐した木の多くはカットしてその場で腐らせ土に返すという事ですが、せっかくの重労働の対価がなく、森林保全のためだけだということは勿体無いですし、ボランティア活動とはそんなものという気もします。第一回講義の林業の展望、二回講義の森林の生態、五回講義の土の生態学など、室内講義の実態を体感できる実習で折角講義を受けたのに、雨で休んだという人はもったいないことをしたと思いました。講義で木が雨から土を保護すると習ったばかりだったのに。

私も、俺も

≪３班≫

〇雨の中、馬ヶ瀬演習林ヘルメット着用して、伐採から玉切りまでのデモンストレーションを見学しました。その後、道具の手入れ大変だったと思います。丁寧な対応感謝します。ヒノキの香りが心地良く、参加できてよかったです。

〇「演習林での野外実習」ということでの参加でしたが生憎の雨、現実は実習どころではなく期待外れでした。私自身、2002 年に兵庫県で「チエンソー使用の特別教育終了証・併せ仮払い機」を頂き、兵庫県山崎町の小茅野の里山保全を 15 年間（2017 年まで）活動して参りました。間伐・下刈作業は危険が伴う大変な作業です。今回の様な雨の中の作業実習は不可能でしょう。天気予報で雨の確率が何パーセントで中止・延期にするのか分かりませんが難しいご判断となることでしょう。（思い切った判断が必要）実習でできることは下草刈りと登山道の整備（もたれ木や枯れ木の樹皮の無い木材を使用した土留め）が現実的だと思います。実際の間伐・玉切り等の作業は教室でパワーポイントなどによる画像での解説が現実的（危険度も分かります）だと感じます。　　以上

伐り口から良い香りがするな

【回答に変えて】

当日は冷たい雨の中をご苦労さまでした。良い天気でしたら各班 2 本程度伐る予定でした。

ところで私は「切る」でなく「伐る」と言いました。林学では立木を切ることを「伐採」と言います。伐って採取（利用）するためなのです。しかし近年は間伐材を利用することなく、林内に放置するようになっています。　何故でしょうか。

昭和 40 年頃までは、根元径が 5～15cm の丸太は、短いものでは杭やダテ足として使い、長いものでは足場丸太や稲を乾燥させるダテ棹として利用されてきました。15～20cm のものは垂木や板材として利用され、30cm 以上になれば材木として売られて来ました。

しかし近年では殆ど利用場面がなくなり、林地に置いておく「切り捨て間伐」となってしまいました。良い材を育てるのと、林床に光を落として下層植生を育てるため間伐をしているわけですから、ただ林地に切り捨てるわけにはいきません。間伐した木は斜面に平衡に、残された木に寄せて転がり落ちないように置き、流れる雨水により土壌が流れ落ちないようにして林地を保全します。

また、伐った木の枝は１、２箇所に積んで、蒸れて早く腐らせ、腐植として林地に還元させるようにします。間伐といっても以上のようなことをして、林地を保全しているわけです。

皆さん、毎月第 4 日曜日には林地保全間伐を実施しています。毎回とは言いませんので馬ヶ瀬山に是非お出かけ下さい。

伊藤　孝美

私が見た植物の不思議（６）ヌルデ編

自然と緑理事　関澤　友規子

ツタウルシ、ヤマハゼ、ヤマウルシとかぶれる危険のあるウルシ科の仲間にヌルデがあります。この仲間は特に若葉の頃は弱い方には近くを通るだけでも要注意と聞きますが、その中でヌルデは独特の植物です。と言うのは秋の白い物質をまとった実①は「酸っぱい塩味」で秋の楽しみの１つ。この白い物質②はリンゴ酸カルシウム。鳥が食べて「種を運ぶ」のを期待しての、とも聞きますが、哺乳類の私も楽しみに。これが目立つのは一時的ですが、味わった後の種は飲みこまず、離れた場所に「ぷっ！」と飛ばしてあげましょう。新天地で頑張れよ～と。なお他の仲間も似たような実をつけるものの、味わうのは絶対にヌルデだけにして下さい。ヌルデは羽状複葉の真ん中の軸に「翼」があるので、他の仲間との見分けは容易ですが、気を付けてどうぞ。

また虫こぶ・ヌルデミミフシ③が出来、これが「五倍子（ごばいし）」昔の歯の化粧「漿（おはぐろ）」の材料になるそうです④ 冬芽⑤は「ぼふっ」という毛束の感じでウルシの仲間とは一線を画しています。さてこの秋、「ヌルデの塩」も探して味わってみて下さいね。

①2010年10月16日の実

②同年11月３日この白い物質が美味

③2010年10月16日虫こぶ

④ 同年11月20日割ってみる

⑤ぼふっとした毛の冬芽

【寄付等の御礼】
いつもありがとうございます

＜切手、ハガキ、現金など＞

8/17　NK 有志　　寄付
9/10　匿名希望　　寄付

ご寄付は下記までお願いします

ゆうちょ銀行口座名：
特定非営利活動法人　自然と緑

口座記号：　００９００－７
口座番号：　１５０９４２

振込用紙の通信欄に「**寄付**」と明記願います。

自然と緑の活動報告　2026 年 8 月～2026 年 10 月

◇ 8/ 2(日)　第 31 期自然大学室内講義「土の生態学」… 50 名
◇ 8/ 6(木)　8 月期理事会 …… 15 名
◇ 8/23(日)　近江馬ヶ瀬山ふれあいの森「定例間伐」…… 28 名
　〃　「炭焼き活動」…… 3 名
◇ 9/ 6(日)　ステップアップ講座「救急救命講座」…… 11 名
◇ 9/10(木)　9 月期理事会 …… 14 名
◇ 9/26(土)　教授と行くシリーズ（鍋島教授）
　自然観察会「ウミホタル観察」…… 29 名
◇ 9/27(日)　近江馬ヶ瀬山ふれあいの森「定例間伐」…… 15 名
　〃　「炭焼き活動」…… 3 名
◇ 9/29(火)～
　9/30(水)　オトナの修学旅行　芦生研究林…… 30 名
◇ 10/ 3(土)　馬ヶ瀬山植物調査 …… 3 名
◇ 10/ 4(日)　第 31 期自然大学野外実習「琵琶湖」…… 43 名

------会員募集のお知らせ------

「NPO 法人自然と緑」では随時、会員を募集しております。ご友人、ご親戚を是非お誘い下さい。ご入会・更新は右記 QR コードをご利用下さい。

--ホームページをご活用下さい--

また、この QR コードを読み取ると「NPO 法人自然と緑」のホームページがご覧いただけます。
最新の活動の様子も写真で紹介しています。

★編集雑記

【2026 年 11 月～2027 年 2 月　冬の天気予報】

日本気象協会の予報は「暖冬でも寒波・大雪に注意」

11 月は、気温が平年より高く、冬の訪れは遅くなる見込み。

12 月～1 月は、気温が平年より高く、本格的な冬の到来は遅れる見込み。冬型の気圧配置が続き難く、日本海側の降雪量は平年より少なくなる一方で、南岸低気圧が通過しやすく、普段は雪の少ない太平洋側でも降雪に注意が必要。しかし、南岸低気圧の通過後には、一時的に強い寒気が南下し、日本海側で局地的な大雪となる可能性もあり。

2 月は平均気温は平年より高い見込みで、春の訪れは早まりやすい。ただし、冬の終わりほど寒暖の変動が大きくなり、強い寒気が南下する可能性もあり。

（エルニーニョ現象の影響）

この冬が暖冬となる理由

日本の天候は、太平洋熱帯域やインド洋の海面水温の変動など、海洋と大気の相互作用による影響を受ける。現在、太平洋熱帯域では、東部で海面水温が高く、西部で低い状態となるエルニーニョ現象が発生しているとみられ、冬にかけて続く見通し。

エルニーニョ現象とは、海面水温が平年より高くなり、その状態が 1 年程度続く現象。エルニーニョ現象が発生した冬は、日本では暖冬になりやすい傾向がある。12 月から 2 月は、エルニーニョ現象の影響により、日本付近には高気圧の縁に沿って暖かく湿った空気が流れ込みやすく、全国的に暖冬傾向となる予想。しかし、南岸低気圧が通過しやすく、太平洋側を中心に雨や雪の影響を受ける可能性もある。

皆さん　寒暖差に注意し、体調には十分に気を付けてください。

（イチロー）